

瑞巖寺の住職が応接間として利用した部屋である。障壁画は 1622 年に完成したものであり、本堂にあるものの中で唯一レプリカに置き換えられていない。少量の赤い黄土がインクと混ざり、独特の色合いとなっている。絵師である吉備幸益（生没不明）の落款の痕跡が絵に残っている。モノクロの墨絵は禅美術の特徴であり、建物内の他の部屋と比較しても、墨絵の間は禅寺の典型例であろう。